

日本手話の心理言語学的調査の実践と問題 Some Issues on Psycholinguistic Investigation in Japanese Sign Language

高嶋由布子[†]
Yufuko Takashima

[†] (独) 日本学術振興会, 東京学芸大学
Japan Society for the Promotion of Science, Tokyo Gakugei University
Yufuko.Takashima@gmail.com

Abstract

This paper reports linguistic fieldwork and the setting of a psycholinguistic experiment on Japanese Sign Language, the first language of Deaf people. As a hearing researcher, the author could not design the experiment without help of Deaf consultants because some cultural and linguistic matters need to be solved with Deaf people's intuition. In the process of setting the experiment with them, two specific aspects of the field were considered: Deaf people's perceptual sensitivity and sociolinguistic behavior. First of all, the visual processing of deaf people is different from of hearing people. Secondly, the linguistic environment around deaf people, which indicates that the age of acquiring sign language and their bilingual condition should be considered. We investigated, in addition, the matter of social status in which hearing researchers are the majority who oppress Deaf people as a minority in society. We found a phenomena through the experiment that, Deaf participants say what a Deaf addressee cannot understand only while looking away, but during eye contact with the addressee, almost all signs are comprehensible for the addressee.

Keywords — Japanese Sign Language, Deaf community, language minority, psycholinguistics, fieldwork

1. はじめに

日本手話を心理言語学的方法で調査しようとしたとき、2つの壁が立ちはだかった。生まれながらに聞こえない「見る文化」のろう者の知覚の問題と、社会言語学の問題、すなわち言語のパワーバランスや規範の問題である。

本研究ではこれらの解決策を当事者との協働に求めた。この2つの問題は、日本手話を第一言語にする聞こえない人、すなわち「ろう者」と共に、実験準備から実施、分析まで行うことで解決された。この実験環境という人工的な場は、所与のものに感じられるが、実際はその準備に多くの知見を要し、分析する価値のあるものであったと主張したい。

本OSと同名の『認知科学』誌上での特集[1]ではフィールドを「研究者によって設定された人工

的な活動ではなく、当事者たち自身のリアルな動機や目的に基づく自発的な活動が繰り返される場」と定義している。本稿での「フィールド」は言語学的な興味を持った聞こえる人である私が、心理言語学的な研究をするべく「ろう者」と出会い、日本手話を学び、実験環境を整えるという「自発的な活動」を繰り返した場であるといえる。当初は英語を学ぶのと同様の「第二言語学習」をしているつもりだったが、音声言語話者が音声言語を学ぶのとは異なるハードルがいくつもあった。また、実験を組もうとする中でぶつかった問題は、音声言語と視覚言語の差だけでなく、大言語と少数言語の差も表わしていることにも気づいた。

ここで報告する心理言語学的な実験というのは、触覚表現の収集である。つまり触覚刺激片を触覚のみで覚知し、それを言語化するというものである。刺激に対して、表現を集める手法はエリシテーションと呼ばれるが、日本手話の表現を集めるためにはいくつかの工夫が必要であった。音声言語では実験参加者は目隠しをして刺激片を触り、フィールドワーカーが聞き手になって記録をとるという方法がとられるが、「目隠しができない」「聞こえる人は聞き手になれない」という問題が発生した。

これらがなぜ発生するのかについて、以下本稿では、知覚の問題と社会言語学の問題、それらをもとにした実験デザインに関わる問題についてそれぞれの節で紹介する。

2. 知覚の問題

世間はいわゆる「健常者」がマジョリティを占

めており、聞こえない人は、「聴覚が欠けた状態」だと認識しがちだ。音声言語の「代りに」視覚言語である手話を用いているのだけなので、聞こえる者でも目が見えれば手話は問題なく使えるはずだと考えるのが一般的ではないだろうか。しかし、「聞こえる者でも目が見えれば手話は難なく使える」と考えるのは、短絡的であった。

先天的に聞こえない人は、生まれながらに視覚の使い方が異なる。聞こえない乳児はえび反りして外界情報をつかもうとするし、周りが見えるように外向きに抱っこしないと怒る子もいるという。(越後 P.C.) 聞こえる人間は、環境の変化を主に音によって関知し、物音がすれば目を向ける。しかし、ろう者は生まれながらに、目で環境情報全体を把握しようとする。視野の使い方が異なることはろうの手話話者と手話のできない聴者を比較した実験で報告されている[2]。ろう者が自信をもって「昔、聴覚障害者が車の免許をとれなかったことは差別だ」というとき、「ヘッドフォンをつけて音情報を遮断して歩いたり自転車に乗ったりしている聴者より、ずっと安全」というエピソードを決まって挙げる。彼らの視野は広く、とくに周辺視の動体視力が高い。このことが学習者にとっては課題になる。

手話学習の過程で困ったのは、視覚情報のフレームレートを上げることと、「話者と視線を合わせたまま」周辺視で手の動きを見定めるという知覚能力の獲得だ。これは音声言語間の学習では、「母語と異なる音のカテゴリー（日本語話者にとっての英語の R と L のような）を知覚できるようにする」ことのアナロジーとしても捉えられる。ただ、音声言語だと言語音弁別の問題になるが、視覚言語だと私自身の経験から言えば、視知覚そのものに影響があった。

手話の学習を始めて半年が経った頃、スロー再生で手話話者の動画を見せられ、見逃しがちだがここも要素がある、という解説を受けていた。手話では、手の動きに共起する目や口など非手指要素が重要なのだが、当時、通常の速さの再生では見えなかったのだ。

学習を続けていると、要素が見えるようになってきた。これと同時に電車に乗っていると車窓からの情報量が多すぎるように感じ、酔うようになった。また、雑居ビルの看板の文字などが今までより「うるさく」感じられるようになった。それからというもの、手話を知らない友人とだと、目当ての店の看板を有意に早く見つけられるようになった。ろう者の先生が、手話を学ぶには「(字義通りの) 視野を広げなさい」とよく言っていたが、私の「視野が広がった」実感はこうしたところで観察された。

昨今、大画面で映像が鮮明で精細になったテレビがあるが、普段は効果がわからない。しかしこういうテレビで手話ニュースを見ると、「いつもよりわかりやすい」と感じる。手話は処理する視覚情報が多いのだ。

このように手話学習をするうち、ろう者が「異なった知覚体系」を持っていることが実感を伴ってわかってきたが、ろう者に対して実験デザインをするとき、どのようにしたら適切なのだろうか。ここは、国連障害者基本条約でも採用されているスローガン **Nothing about us without us** に則り、当事者であるろう者に相談しながら進めることにした。

最も重要だったのは、刺激を見せないためでも、目をふさがないこと。視界が遮られると環境情報が殆ど遮断されてしまうため、怖い。

フレームレートは現行の最新型ホームビデオで十分（1秒間に60コマ）であった。

また、意外だったのは、「背景を無地に」することだった。ノイズは少ない方がいいというのは、言語音声を収録するときの基本だが、聴者は映像を撮るとき、無頓着になりがちだと気づかされた。

それから、これは言語行動に関わってくるので第4節でも再度触れるが、カメラは聞き手の目線の高さにするという。手話が「見ればいい」というものではないことがろう者の目を通した実験セッティングから垣間見えてきた。

3. 社会言語学的な問題

3.1. 「ろう者」とは誰か

本研究の対象である「ろう者」は「ろう文化宣言」[3]とこれを出版するに至ったろう者集団から広められた用語法に則っている。それ以前にも「ろう者」や「聾者」「ろう」という語は使われてきたが、この論文で「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」と定義された。つまり、これまで聞こえないことによって定義されてきた「ろう」を、日本手話という言語と、その言語コミュニティ内の文化様式に則った集団として定義しなおしたのである。このような動きはアメリカを手本としており、「ろう者」という語は、アメリカのデフ・コミュニティで広まった大文字からはじまる Deaf の訳語とされる。英語で「聞こえない者」を表わす従来の語は小文字の deaf であり、言語・文化的少数者を表わすことになったのが大文字の Deaf である[4]。本稿ではこの使用言語にアイデンティティを置く定義に従った「ろう者」だけに対象を絞る。

3.2. 手話言語の習得環境

日本手話の実験環境を整えるにあたり、言語習得の来歴は重要なポイントとなる。日本手話が主に継承されてきた場所は聾学校なのだが、聾学校の教育ではあくまで日本語を獲得させることを目的としてきている。

まず手話言語は、親から子へ言語が継承されにくいという特性がある。ろう者同士の結婚も少なくないのだが、その間にろうの子どもが生まれる確率は高くない。生まれながらに手話の環境にあった者は、ネイティブ・サイナーと呼ばれ、音声言語話者同様の言語発達段階を経るといわれている。

しかし、聴者の両親のもとに、ろう児が生まれてくることの方が圧倒的に多い。アメリカでの調査によれば 10 人に 9 人のろう児は両親ともに手話ができない聴者の家庭に生まれてくるという[5]。つまり聴者の親をもつろう児は、親

から継承すべき母語が自然に習得できない。聴者の家庭に生まれた「ろう者」は、幼いころから聾学校に通うことでろう児の集団に接し、第一言語として日本手話を身につけてきた人が多い。とくに聾学校の寄宿舎が日本手話の継承の場となってきた。

現在の日本手話と一続きだと確信が持てる日本手話の起源は、明治時代の聾学校設置と考えられる。これは、言語学者が初めて言語の発生を観察したニカラグア手話の事例[6]と同じだという解釈である。1980年にニカラグアで聾学校ができて、聴覚障害児が集められた。ここで現地の音声言語から独立した構造をもつ自然言語として、手話が発生したのが観察された。これと同様に、明治時代に聾学校ができたことで、ろう児の集団が生まれ、そこで日本手話が自然発生したと考えるのである。

注意しなければならないのは、日本手話は全国的に共通語として教育がされておらず、聾学校ごとに言語環境が異なり、それぞれ言語が変化している点と、聴覚障害をもった子どもが皆、聾学校に行くわけではない点である。さらに、その教育環境に日本語対応手話が導入されることによって、聾学校出身者の言語＝日本手話といっても、その手話自体も変化してきているという報告もある。[7]

また、聾学校に通っていた人でもその在籍年数がまちまちである。とくに 1980 年代以降、インテグレーション教育が提唱され、地域の学校の普通クラスや難聴学級に通う子どもが増えた。聾学校から普通校に行ってまた戻るといった経験をした人も少なくない。このため、日本手話を第一言語にしているというろう者でも、日本手話と接触しはじめた年齢と習得年数にはばらつきがある。

3.3. バイリンガルとコードスイッチ

日本語など、大言語である音声言語話者を対象にする実験と異なるのは、対象者が少数言語話者であり、バイリンガルであることである。

少数言語話者は、取り囲まれている大言語を覚えなければ社会的な不利を被ることになる。このため、ろう者は日本手話を第一言語にするといっても、日本語と無縁ではいられない。

日本手話を母語＝第一言語とするネイティブ・サイナーでも、第二言語として日本語は必然的に身につけざるを得ない。

バイリンガルの方は、よくコードスイッチを起す。ろう者同士では日本手話で話していても、とりまく社会では日本語が必要であり、日本語に切り替えている。コードスイッチは無意識に起こるものもあり、ろう者本人が声を出さずに日本手話を話していたつもりでも、声を出して日本語対応手話に近くなっていることもある。日本語対応手話は、日本手話の単語を借用しているが、文法が日本語なので日本手話とは別の言語だ。つまり日本語と日本手話ができれば、日本語対応手話らしきものも使うことができる。

バイリンガルのコードスイッチは無意識に起こる現象として知られている。アメリカ手話で行われた実験でも、アメリカのろう者が、話し相手の使用言語や聴覚障害の有無によってコードスイッチする現象が報告されている[8]。これと同じことが常に起こっている。

とりわけコードスイッチは社会的な立場によって起こる。ろう者の社会的な立場は低く、数が少なく、常に聞こえる人に囲まれている。聞こえる私は暗黙のうちにその抑圧者であるマジョリティの一員として位置づけられる。バイリンガル話者が、相手の言語を察知してコードスイッチするとき、言語の力関係は大きな動機となる。私を聴者と認識するなり発声したり、日本語対応手話にコードスイッチしたりするろう者も少なくない。

聴覚障害者の言語調査では、この言語のパワーバランスが実情を見えにくくする要素として働く。だからろう者でない者が日本手話を捉えようとするときには、日本手話の習得と、その話者との距離をつめることが鍵となる。ただ、

学習しにくい言語行動の差として、聴者はあいつちの打ち方が違うので話しにくいともいわれ、聴者が一人で日本手話の自然な発話を採集するのは難しい。ゆえに、自分が聞き手にならないという方法が必要であった。

4. 心理言語学的実験のセッティング

本節では触覚サンプルを使った実験のセッティングをろう者のコンサルタントと行ったときのことについて記述する。このプロセスからみえる、言語の媒体と社会的状況の違いがもたらす現象を報告する。

4.1 心理言語学的実験の概要

ろう者の言語様態を調べるために、同内容のものに対する言語表現を集めるエリシテーション・タスクを行った。今回用いたのは触覚サンプルであり、実物を見ないで触ったものがどのようなだったか表現してもらおうというものである。同じ刺激についてどの程度表現が収束し、どの程度のバリエーションがあるのか調べるのが目的である。

まず、数の少ないネイティブを使うか検討した。言語調査ではまずネイティブという原則もあるが、前節で述べたとおり、日本手話とは、習得場所である聾学校による差も大きく、また習得年齢もばらばらの者が作るコミュニティのなかにあるコードである。ゆえに、それが通じているという事実から方針を定めた。規範意識が乏しい言語ではあるが、共有されているコードを観察対象に定め、ネイティブ以外も含む「ろう者」コミュニティの言語について、心理言語学的手法を用いて、表現収集をすることにしたのである。

4.2 打ち合わせとコードスイッチ

手話の分らない聴者と手話通訳と、ろう者と私で行った実験の打ち合わせで、早速コードスイッチの問題に直面した。このとき私は日本語で話し、横でろう者が通訳を介して聞く（見る）

という方法をとった。

このとき、実験の手順や目的について話した上で、触覚サンプル片をろう者に触ってもらって「こういうのを触ってもらって、それに対応する表現を集めたいのだがどうだろう」と質問した。しかし、いまいち表現がでてこない。コンサルタントは「あんまり表現がないかも」という。

この状況をろう者のベテラン手話教師に相談すると、「ろう者は聴者に囲まれると緊張するし、通訳を介していても話されている日本語を捉えようとするものだ」と改めて言われた。実験では「リラックスして話せる」環境を作り、「ろう者が聞き手になる実験にする」ようアドバイスをもらった。

ろう者は日本語を捉えるための訓練を幼少期から受けているし、聴者を見ると自然にコードスイッチしてしまう。そのコードスイッチを極力避け、できる限り自然な日本手話話者同士の会話を作るのが、言語収集の要だと再認識した。

そこで聞き役となる実験実施者をろう者にお願ひし、私は実験室では喋らないようにすることにした。実験前の倫理的な手続きである実験参加同意書の説明もろう者に行ってもらい、実験前から実験中は日本語がなるべく介在しないよう留意した。私はデータを撮り終えるまでは助手の役割に徹した。もちろんほかのオプションとして、聴者がまったく部屋にいない状態、あるいはマジックミラーの向こうで待機して何かあったときだけ対応するという方法もある。

4.3 実験参加者と実施者の関係

今回の実験では、「日本手話」を第一言語にする「ろう者」のデータを撮ることにした。しかし実際のところ「自分の第一言語は日本手話である」と自他共に評価するのは難しい。第3節でも述べたように、ろう者はその生育歴も、聾学校など言語集団への参加した年齢も、その集団の質も、関わった長さもまちまちであるからだ。自身は「ろう者」だと主張しても、「あの人

の手話は日本語混じりのものだ」とまわりに思われていることもある。また、聾学校では公的に日本手話を認めてきていないため、自分の参加してきた集団が「日本手話」の集団だったのか確信を持つのは難しい。

今回は「できるだけリラックスした環境」でできることと、ろう者コミュニティの狭さ、それが影響を及ぼすであろうコミュニケーションの質を鑑みて、実験実施者となるろう者の知り合いを集めてもらうことにした。実施者は60代のろう者で、周りからの人望も厚い。ネイティブではないが聾学校にずっと通っていたろう者である。

実験参加者は、実施者の知り合いで、実施者とその周囲の人が「日本手話を話しているろう者である」と思っている人を集めてもらった。参加者12人のうち3人はネイティブ・サイナーであり、ほかの9人も皆、日頃からろう者コミュニティのなかで積極的に活動している人たちであった。ここで集められたデータは、ネイティブ・サイナー偏重にならない、私が調査対象としているろう者コミュニティの言語使用を反映したものになっていると考えてよいだろう。

4.4 コミュニケーションのモダリティ効果

さて、ろう者は聴者と違い、目を合わせて話をする。この世界の人々は「目を合わせていないことは聞いていないこと」になる。

視覚に頼らない感覚の表現を収集するため、目隠しをつけて実験をやる方法があると伝えると、第2節でも述べたが、ろう者に無理だと言われた。同様の実験はマックス・プランク心理言語学研究所の言語調査で行われており、このマニュアルでは、アイマスクを使って実験をする方法がまず提示されている。それが受け入れられない場合は布で覆うなどして見えないようにして実験をすると書いてあった。[9]

目隠ししたままのコミュニケーションは、聴者にとっても非日常ではあるのだが、それでもできなくはない。だからこそ、まずアイマスク

の使用が提示されているのであろう。しかしろう者にとっては、確実にだめである。この理由は主に3つある。コミュニケーションのルール、言語情報の欠落、情報の遮断である。

まず、コミュニケーションのルールが成り立たなくなる。ろう者の発話では、目をあわせて話すのがデフォルトになっている。ろう者は聞き手と目を合わせるどころから会話が始まり、目をそらしたら会話が止まる。それゆえに目をあわせることができない状態で情報を発信することは非常にむずかしい。

ふたつめの理由は、目隠しがデータ収集に邪魔になることである。手話は、手指の動きが本体だと思われがちだが、実は主に見ているところは顔であり、手指の動作は周辺視で把握している。目を合わせたまま喋るため、顔面で表わされる文法要素が重要な言語要素となる。この顔の要素、とくに目の周りの要素をアイマスクで隠してデータを収集することは、音声言語で、ある一部の音域や音をマスクした言語データを分析するような試みに相当する。

第三の理由は、ろう者がもっぱら、目からのインプットに頼って外界を把握している点にある。これは第2節で述べた。リラックスして実験に参加できることが必要だという条件からも、そんな状態で実験ができないのは明らかである。

結局、実験では箱を用意し、目ではなく刺激を隠すことにした。

アイマスクを使うという方法は、最初からろう者が、ろう者対象の実験デザインをしたとしたら、アイディアとしてもあがってこないものだろう。この話がおもしろいのは、聴者が想定した実験環境では、実験が成り立つというところでもある。

4.5 カメラと視線

次に、分析するためのデータの撮影について記述する。手話は、手指や顔、上体の位置など、同時に表わされている要素とそのタイミングまでが言語要素だといわれている。つまり、どこ

からどこまでを言語要素としてとりだせるか、その場で判断して紙に記述するのは難しい。このため、まるごと映像に収めることになる。

カメラの位置について、私は言語要素となる顔、胸部、手の動きが入れば角度は自由だと思っていた。しかしろう者はカメラを、聞き手の目線の高さで、なるべく聞き手の顔のそばになるように設置した。目線の高さにあっていないと「違和感がある」からだという。見えないカメラがあるのなら、聞き手である実験実施者の眉間あたりが理想的な位置のようだ。

4.6 「ひとりごと」と視線

カメラの位置は、分析をする段階になって、意義がわかった。もともとろう者のコミュニケーションにおいては「視線を合わせる」ことが重要で、「視線が合っていないと気持ちが悪い」ことは知っていた。しかし新たに発見したのは、ろう者は視線を合わせる時は、相手に通じるようにしゃべっているということだ。

刺激を触っているときは、目線が合っていない時間が長い。そして、それがなんだかわかってくると、実験参加者は聞き手である実験実施者と視線を合わせて「こういう感じ」と話す。彼らは触りながら視線を外して、何か言っていることもある。聞き手だったろう者は改めて録画を見て「視線を外しているときに言っていることのなかには、わからない表現がある」という。逆に、視線が合っているときは、ほぼ理解可能な表現であった。つまり、実験参加者たちは、実験者に合わせて表現を選んでいたことになる。視線を合せていないときの表現は「ひとりごと」で、これはろう者個人に属する手話表現である。

これは、相手の様子を見ながら話す手話ならではの現象かもしれない。実験実施者は実験参加者が話しやすいように振る舞う必要がある。ろう者にとって「相手がいない／見えない発話」は不自然であり、相手が居るときは相づちを打ってくれるのが通常である。そこで実施者と相

談し、実験参加者が出した表現以外には、新しい表現をつけたさない、実験参加者が言った表現の復唱、「ああ、そうそう」「なるほど」などの相づちをなるべく自然に挟む、ということにしていた。しかし、その「相づち」の情報量は、もしかすると音声言語の相づちより多いのかもしれないのである。

手話は、言語集団が小さく、公的に教育されておらず、標準語化もすすんでいないため、方言差や、個人差が大きい。だからこそ、話し手は聞き手に合わせた表現を選んでいるのかもしれない。今回は、実験の参加者が実施者の知り合いであることから、実は、実施者のコードの範囲内の表現が集められたともいえるのである。

4.7 実験を通して得たフィールドの性質

この実験を通して得たものは、ろう者と聴者のコミュニケーションのモダリティが及ぼす感覚の違いへの気づきである。実験のセッティングにあたって、音声言語では当然できることが、「できない」と言われて、はっと気づく。目隠ししても実験ができるのは、実は不思議なことだ。目隠しをして実験しようという発想が生まれること自体が、言語コミュニケーションには視覚は関係ないと考えている証拠なのだ、ということに思い当たった。

また、映像の背景についても、「見ればいい」という発想ではないということも考えてみれば当たり前のことなのかもしれない。しかし、私は「見ればいい」と思っていたことに気づかされたのだ。

言語には聞き手が必要なのに、聞き手の属性を考慮しないでもデータが採集できるという考え方を最初はしたものだ。特にこのフィールドでは影響が大きかったが、「観察者」がいることが「フィールド」に与える影響は、いつも考えなければならない変数だろう。

この実験デザインの過程からは、とくにろう者のコミュニケーションにおける相手への配慮が、音声言語話者のそれとは異なることが浮き

彫りになった。音声言語では喋ることと聞くことが非対称的であるが、手話の場合「見る／見られる」は相互通行可能なコミュニケーションである。このことが言語産出に及ぼしている影響は一考に値する。今回、ネイティブ・サイナーだけでない「ろう者」を集めたが、実は話し手だった実験参加者の言語相だけが採集されたわけではない。ひとりごとのコードと、聞き手へ向かって報告するときのコードが異なるということは、そこに何らかの調整が入り込んでいることを示している。実験実施者はろう者で、得られたデータが日本手話のデータであることは間違いない。しかし、実施者が別のろう者だったら、得られるデータが違ったものになることは十分にあり得る。聴者の第二言語学習者としての手話話者である私が実験者だったら、もっと乏しいデータしか得られないことは言わずもがなである。

5. 考察

本稿では、日本手話を心理言語学的方法で調査しようとしたときに出くわした、知覚と社会言語学の問題についてまとめ、それをもとに行った実験デザインについて報告した。日本手話を第一言語にする「ろう者」と協働して解決するプロセスから、いくつかの示唆を得た。これらの示唆は、おおざっぱに言えば「聞こえる人」が当たり前に思っている「コミュニケーション」は、聞こえることが基準になっていて、ろう者のコミュニケーションとは異なるということである。それゆえに、その違いはろう者と協働することでしか見いだせなかった。たとえば目線が合っているときと、そうでないときでコードが異なるという事例は、視覚言語でのコミュニケーションの特徴と、日本手話が規範化された標準語を持たない言語の不安定さの両方を示している。また、予備実験とも見なせる打ち合わせの時点で、コードスイッチがはっきりと観察された

このように、実験を組むにも、ただ闇雲に従来の方法を適用するのではなく、言語使用の背景と

なる社会言語学的な状況，知覚的な差異についての情報が重要である。それらをもとに，実験の対象となる属性を持つ人と共に研究を進めることが，解決策をもたらすと共に，従来の言語観や実験デザインを見直す鍵となることが示唆される。これはなにも，手話やろう者，障害者だけでなく，異なる感覚を持つ人々を研究対象にする「フィールド」にとって重要な態度であるといえるだろう。

謝辞

本稿は『認知科学』Vol.22, No.1, 181-193. (2015)に掲載された同名の論文を元としている。匿名の査読者と特集のエディターに感謝したい。また，この研究はJSPS 科研費 特別研究員奨励費 25-10373 の助成を受けたものである。本実験はNPO 法人手話教師センター佐野立太郎氏の寄与するところが大きい。また同センター所属の秋元美智子氏，越後節子氏，末木一美氏との議論と，国立障害者リハビリテーションセンター学院 市田泰弘，木村晴美，野口岳史，宮澤典子各教官から日本手話のフィールドについて多くのことを学んだ。NTT コミュニケーション基礎研究所の渡邊淳司氏には触覚サンプルを提供してもらい，実験設計の相談に乗ってもらった。ここで感謝を述べたい。ただし本稿の認識の誤りがあればそれらはすべて筆者の責任である。また，本稿における意見はすべて筆者の個人的な見解である。

参考文献

- [1] 伝康晴，諏訪正樹，藤井晴行，(2015) “特集「フィールドに出た認知科学」編集にあたって”，認知科学，Vol. 22, No.1, pp. 5-8.
- [2] Neville, H. J., and Lawson, D., (1987) “Attention to central and peripheral visual space in movement detection task: An event-related potential and behavioral study: II. Congenitally deaf adults”, Brain Research, Vol. 405, pp. 284-294.
- [3] 木村晴美・市田泰弘(1995) “ろう文化宣言”。現代思想, Vol.23, No. 3, pp. 354-362.
- [4] Padden, C. and Humphries, T., (1988) Deaf in America: voices from a culture. Harvard University Press. 森壯也・森亜美訳(2003) 「ろう文化」案内. 晶文社.
- [5] Mitchell, R. E. and Karchmer, M. A., (2004) “Chasing the Mythical Ten Percent: Parental Hearing Status of Deaf and Hard of Hearing Students in the United States”, Sign Language Studies, Vol.4, No. 2, pp.

138-163.

- [6] Kegl, J., Senghas, A., and Coppola, M., (1999) “Creation through Contact: Sign language emergence and sign language change in Nicaragua.” In M. DeGraff (Ed.), Language Creation and Language Change: Creolization, Diachrony, and Development Creation through contact, pp. 179-237. MIT Press.
- [7] 長南浩人, (2005) “手話の表現と理解”，長南浩人(編) 手話の心理学入門. 東峰書房.
- [8] Lucas, C. and Valli, C., (1990) Sign Language Research: Theoretical Issues. Gallaudet University Press.
- [9] Majid, A., Senft, G., and Levinson, S. C., (2007) “The language of touch.” In A. Majid (Ed.) Field manual, Vol.10, pp.32-35. Max Planck Institute for Psycholinguistics.